

# 九州天皇家論 7章 吉野の宮

## 九州天皇家の都

# 景行紀の戦場は小倉南区

神武天皇が「秋津島」と名付けた小倉南区に九州天皇家の「吉野の宮」が存在した。「吉野の宮」は離宮ではなく、王朝の中心的な大宮だった。では、何故、小倉南区にそのような宮が存在したのか。何故、人麿はこの地を「滝の都は」と歌を詠んだのか。そもそも人麿は何故、ここにいたのか。一体、小倉南区とはいかなる土地なのか。小倉南区の歴史を探究しなければならない。小倉南区ともっとも縁が深かった天皇は景行天皇である。景行紀の戦場は小倉南区である。景行天皇が小倉南区「扉を開ける。

冬十月に碩田國に到りたまふ。其の地形廣く大きにして亦麗し。因りて碩田と名く。速見邑に到りたまふ。女人有り。速津媛と曰ふ。一所の長たり。其れ天皇の車駕すと聞りて、自ら迎え奉りて諮して言さく、「此の山に大きな岩窟有り。鼠の石窟という。二の土蜘蛛有り。其の石窟に住む。一をば青と曰ふ。二つを白と曰ふ。又直入縣の禰疑野に、三つの土蜘蛛有り。一をば打猿と曰ふ。二をば八田と曰ふ。三をば國摩呂と曰ふ。是の五人は並びに其の為人強力くして、亦衆類多し。皆曰わく「皇命に従はじ」というふ。若し、強に喚さば、兵を興して距かむ」とまうす。天皇悪したまひて、進行すこと得ず。即ち来田見邑に留りて、かりに宮室を興して居します。よりて群臣と議りて曰わく「今多に兵衆を動かして、土蜘蛛を討たむ。若し其れ我が兵の勢いに畏れて、山野に隠れてば、必に後の愁いを為さむ」とのたまふ。則ち海石榴樹を採って、椎に作り兵にしたまふ。因りて猛き卒を簡びて、兵の椎を授けて、山を穿ち草を排ひて、石室の土蜘蛛を襲いて、稻葉の川上に破りて、ふつくに其の輩を殺す。血流れてつぶなきに至る。亦血の流れし所を血田という。復、打猿を討たむとして、ただに禰疑山を渡る。時に賊虜の矢、横に山より射る官軍の前に流ること雨の如し。天皇、更に城原に返りまして、水上に卜す。便ち兵を整えて、先ず八田を禰疑野に撃ちて破りつ。ここに打猿え勝つまじと謂いて「服はむ」と請す。然れども許したまはず。皆自ら谷に投りて死ぬ。 (日本書紀・景行天皇)

景行紀の碩田(おおきだ)國はどこか。日本書紀(日本文学大系)・頭注は大分県大分市である。果たして碩田は大分市か。豊後國風土記中曾根史を見てみよう。

## 碩田 = 大分 = 小倉南区の朽網

### 豊後國風土記 大分の郡

郷は九所、駅是一所、烽は一所、寺は二所なり。昔者、捲向の日代の宮に御宇しめしし天皇、豊前の國の京都の行宮より、この郡に幸して、地形を遊覽て、嘆きてのりたまひしく、「廣く大きなかも、此の郡は。碩田と名づくべし」とのりたまひき。今、大分と謂う、これ其の縁なり。

大分川、郡の南にあり。此の河の源は、直入の郡の朽網(くたみ)の嶺より出で、東を指して下り流れ、此の郡を經過ぎて、遂は東の海に入る。因りて大分川といふ。年魚、多にあり。

ここに書かれている大分は現在の県と異なる。理由は「朽網(くたみ)」である。朽網(くたみ)はそのまま

現代まで引き継がれている。豊後風土記の朽網(くたみ)は小倉南区朽網(くさみ)である。大分川とは朽網川である。風土記の大分は小倉南区・朽網であるが景行紀では「来田見邑」と書かれている。ここに「速見の郡」がある。「速見の郡」も小倉南区である。景行天皇が巡狩したのは大分県ではない。

景行紀に「二の土蜘蛛有り。其の石窟に住む。一をば青と曰ふ。二つを白と曰ふ。」と「青」と「白」の土蜘蛛が登場する。豊後國風土記・速見郡の記録にも同じものがある。

## 豊後風土記「速見郡」は小倉南区曾根



### 速見の郡

郷は五所、駅は二所、烽は一所なり。昔者、卷向の日代の宮に御宇しめし天皇、熊襲を誅はむと欲して、筑紫に幸し、周防の國の佐婆津より発船して、渡りまして、海部の郡の宮浦に泊てたまひき。時に、此の村に女人あり。名は速津媛といひて、其の所の長たりき。即ち、天皇の行幸を聞きて、親自ら迎え奉りて、奏言ししく「此の山に大きな磐窟あり、名を鼠の磐窟といひ、土蜘蛛二人住めり。其の名を青・白といふ。又、直入の郡の禰野に土蜘蛛三人あり。その名を打猿・八田・國摩呂といふ。是の五人は、並びに為人、強暴び、衆類も多にあり。皆、謡していへらく「皇命に従はじ」といへり。若し、強ちに喚さば、兵を興して距ぎまつらむ」とまをしき。ここに、天皇、兵を遣りて、其の要害を遮へて、ことごとに誅ひ滅したまひき。これに因して、名を速津媛の國といひき。後の人改めて速見の郡というふ。

風土記にも「此の山に大きな磐窟あり、名を鼠の磐窟といひ、土蜘蛛二人住めり。其の名を青・白といふ。」と「青」と「白」の土蜘蛛が記録されている。九州天皇家によって「青雲」と呼ばれた王は速見郡、碩田國、朽網の支配者だった。此の山とはどの山か。「中曾根村史」に同じ内容の記事がある。

### 中曾根村史[言い伝えによると]

上塚 中曾根村の北方三町に在り。古時、景行帝祢疑山[貫山]の怪物を討伐し、死体を三分し、其首を比土に埋め号して上塚と、土人伝へり。

中塚 中曾根村の北方五町に在り。胴体を埋める。

下塚 下曾根村の東方三町に在り。その他の部分を埋める。周囲七拾間の土塚、樹木無し。

此の山とは貫山である。怪物とは「青」、「白」の土蜘蛛でその死体を三分割して埋葬したのが「上塚」「中塚」「下塚」である。現在もその名が残る。貫山も小倉南区にある。貫山(ぬきさん)711mの名山である。

企救郡誌の記述も見てみよう。

貫 元和八年の記録に貫村があり、正保図、元禄図には何れも貫村として上中下の別が無い。日本書紀景行天皇紀に祢疑山など見えたるは此所也。同書安閑紀には大抜きとしるされ、又万葉集に抜氣とあるも

是所なるべし。応永戦乱には貫の文字を用いてある。

(企救郡誌)

ここには「祢疑山など見えたるは此所也」と祢疑山が記録されている。貫の村の祢疑山とは貫山である。



祢疑山  
(小倉南区貫山)

## 「血田」は現・津田

小倉南区に「津田」という土地がある。この「津田」は元は「血田」といわれた。景行紀にそのいわれが記録されている。

今多に兵衆を動かして、土蜘蛛を討たむ。若し其れ我が兵の勢いに畏れて、山野に隠れてば、必に後の愁いを為さむ」とのたまふ。則ち海石榴樹を採って、椎に作り兵にしたまふ。因りて猛き卒を簡びて、兵の椎を授けて、山を穿ち草を排ひて、石室の土蜘蛛を襲いて、稲葉の川上に破りて、ふつくに其の輩を殺す。血流れてつづなきに至る。亦血の流れし所を血田という。

景行が土蜘蛛を討った時、多くの血が流れた。それ故にこの地を「血田」と云うようになった。「血田」が「津田」に訛ったのである。同じ地名の由来が企救郡誌に出ている。

## 企救郡誌・津田

正保図には津田の名が無い。元禄図に始めて現われて居る。日本書紀景行天皇卷曰、石室の土蜘蛛を討給ひし条に、穿、山排、草、襲石室土蜘蛛、而破稲葉川上、悉殺其党、血流至、課、故時人其作海石榴椎之处、曰海石榴椎市、亦流、血处曰血田と書かれし是也。今津田と云は、続日本紀和銅六年の条に、諸国郡郷名、好字を著よと詔在。又民部式曰、郡里等之名、並用二字、必取嘉名と云々。此例に依、血てふ言を忌て、津の字に移せし成べし。  
(企救郡誌)

企救郡の津田は元々血田という地名であった。企救郡は企救半島の名前で残っている。小倉南区の古き地名である。景行紀は貫山、朽網など小倉南区の戦記である。

## 帝踏石

景行天皇が土蜘蛛の討伐を祈願したという大岩が朽網にある。誠に大きな石である。岩は大きく、且つ丸い。この岩が在るのは日豊本線・朽網駅近くである。かつてはこのあたりまでが海岸線であったと伝わる。これらの大岩は海の浪に洗われて丸くなったのであろう。無邪気に遊んでいる近くにすむ小学生にこの石のいわれを聞くと景行天皇のことは習ったようなきがすると答えてくれた。



景行紀は小倉南区の歴史を記録している。当時、小倉南区の「津田」「曾根」「朽網」は土蜘蛛の支配下にあった。神武天皇はこの地で勝利をおさめたが景行天皇は再び遠征してこの地の支配者と戦った。景行天皇はこの戦闘の時、「京都」から北上して小倉南区に進出している。「京都」とは行橋市である。現在も「京都郡」と呼ばれている。景行天皇の征討以降、小倉南区は九州天皇家の一つ中心となった。

昔者、捲向の日代の宮に御宇しめしし天皇、豊前の国の京都の行宮より、この郡に幸して、地形を遊覧て、嘆きてのりたまひしく、「廣く大きなかも、此の郡は碩田(おおきだ)と名づくべし」とのりたまひき。今、大分と謂う、これ其の縁なり。 (「豊後國風土記 大分の郡」)

景行天皇が「大きな田だ」と感嘆した小倉南区曾根地方は竹馬川、大野川、貫川、朽網川によって形成された洪積平野である。豊かな水田、川海の幸に恵まれた土地である。ここに九州天皇家の都が存在した。その後、九州天皇家の陵がここに作られることとなる。

## 小倉南区の天皇陵

九州天皇家の河内國(小倉南区)には、九州天皇家の歴代の王墓が存在した。古事記に記載されている天皇陵の所在地の多くは「河内國」である。

河内國・腋上博多山之陵・・・第五代孝昭天皇  
河内國・志儀・・・・・・・・・・倭 建

河内國・恵賀・・・・・・・・・・第十四代仲哀天皇・第十五代応神天皇・第十九代允恭天皇  
河内國・毛受の耳原・・・・・・・・第十六代仁徳天皇・第十七代履中天皇・第十八代反正天皇  
河内國・多治比の高鷲・・・・・・・・第二十一代雄略天皇

倭建以降、九州天皇家陵は河内である。河内とは小倉南区である。九州天皇家の都、小倉南区九人の王が埋葬されている。

## 小倉南区の天皇を祀る神社

小倉南区には陵だけでなく、天皇を祀った神社が存在する。特に仲哀天皇、応神天皇、神功皇后を祀る神社が多い。神社はかつて「お宮さん」と呼ばれた。この呼称は神社はかつては「宮」であったことを示唆する。

次に紹介する「荘八幡神社」の祭神は応神天皇である。所在は小倉南区・中貫である。古事記によると応神天皇の「宮」は「軽島の宮」である。小倉南区・中貫あたりは古代は海が入り込んでいた。「荘八幡」が「軽島の宮」だったと考えることもできる。小倉南区に存在する九州天皇家の陵、天皇を祭神とする「お宮(神社)」の存在。これらは小倉南区が九州天皇家の都であったことの立証であろう。

### 荘八幡神社 小倉南区中貫本町3

荘八幡神社御縁起によると

祭神 一の御座 譽田別尊(應神天皇)  
二の御座 息長帯媛命(神功皇后)  
三の御座 多紀理毘賣命(宗像の大神)  
市寸嶋比賣命(宗像の大神)  
多岐都比賣命(宗像の大神)

第56代 清和天皇の御宇貞観元年 宇佐八幡宮の御分霊を神輿に捧持し京都の男山にお祀りすべく、宇佐の地を出発され、途上貫の庄に鈴石と云う大石が有り、一夜この石の上に駐興せられた。

当時の貫の領主、少式従五位の下 石川朝臣左近将監直木が自ら神主となり、第57代 陽成天皇の御宇 元慶七年二月 社殿を造営し、宇佐八幡宮大神の御分霊としてお祀りした。その昔、足利尊氏公より八十町の祭田の献上あり。

神社名は鈴石神社から懸庄神社そして、藤原氏の荘園であったことに鑑み、荘八幡神社と三度改称。



## 沼八幡神社 北九州市小倉南区沼本町4-19

沼楽で有名な八幡神社

沼村にあり。

祭神: 仲哀天皇・神功皇后・姫大神

末社: 明神社・水神社・大明神社・貴船社・荒神様・山神様・

〔企救郡誌〕

初在於吉田村之浜而、与龍王社同、元龜二丑年平塚勘解由左衛門久吉再建にて、社領御寄附等有。其頃平野家社職之处、元和年間、沼村産神の故を以て、川江吉一社職と成。

慶安三年沼村一丸山奉還。古文章寄附状等は于平野家在。

天保十三年寅年沼村新開築立成就之時、新田之内一反、從小笠原侯在御寄附。

## 津田八幡神社 小倉南区津田3丁目2番地

祭神: 品田天皇・気長足姫命・玉依姫命

抑当社は宇佐宮より雄徳山御遷座の時、貫庄(生岩山の大岩に神興御休ありて)暫く御仮宮に座まし故、其所に八幡宮の幸魂を奉祝也。

其後円融天皇天元二巳卯年三月新に宮殿を造立す。又後柏原天皇の永正六己巳年三月今の所に御遷座也。津田、長野、田原の産宮と崇奉る。

末社津田村14社、下長野14社、田原村5社、上長野15社。 (豊前国誌)

## 葛原八幡神社 大字葛原字足立(小倉南区葛原4丁目2番地)

祭神: 息長帯比売命・品田和気命・吾背於美翁命

由緒: 創立年紀不詳。

## 若宮八幡神社 大字長野字宮畑(小倉南区長野本町2丁目8番地)

祭神: 大雀命・品陀和気命・息長帯比売命

由緒: 社記曰、安和元年三月十五日長野白山の頂に品陀和気命、息長帯比売命を勧請す。

長野城主修理太夫康盛、相州鎌倉より大雀命を勧請し、合て氏神とす。

境内神社 二社

天疫神社・祭神: 須佐之男命 由緒不詳

竈神祠・祭神: 興津彦命・興津姫命・市寸島姫命・大山祇命・高淤加美神・豊日別神・須佐之男神・

猿田彦命・弥都波能売命・忍穂耳命・大雀命 由緒不詳

市寸島姫命以下散在神祠、明治13年6月本社境内に移転す。 (神社明細帳)

景行天皇以降、小倉南区が九州天皇家の中心となった。歴代の天皇はこの地で政権を運営し、宮を作り、陵を作った。天皇を祭神とした神社が存在することはそれ故である。しかし、小倉南区に於ける九州天皇家の歴史は神武東征以降である。神武東征以前の歴史が存在した。それが出雲王朝である。